研究所訪問

群馬県衛生環境研究所
Gunma Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences

群馬県衛生環境研究所は平成１１年４月１日に前橋市岩神町の旧庁舎から，同市上沖町378の新庁舎に移転した．旧庁舎は前橋市出身の詩人萩原朔太郎の詩集「純情小曲集」に歌われた大渡橋のたもとにあった．

新庁舎は上毛三山（赤城山，榛名山，妙義山）の一つ赤城山（1828m）の裾野にあり，前橋市街地を一望できる．敷地面積12，558m^2，延べ床面積5，891m^2，地上５階建て（実質４階），高さ21．8mの鉄筋コンクリート造りである（写真１）．１階に管理部，２階に生活科学部，３階に環境科学部，４階に保健科学部が配置されている．新築移転に伴い，ＩＣＰ－質量分析装置の導入やガスクロマトグラフ・質量分析装置を増設し，施設や分析機器も大幅に整備された．

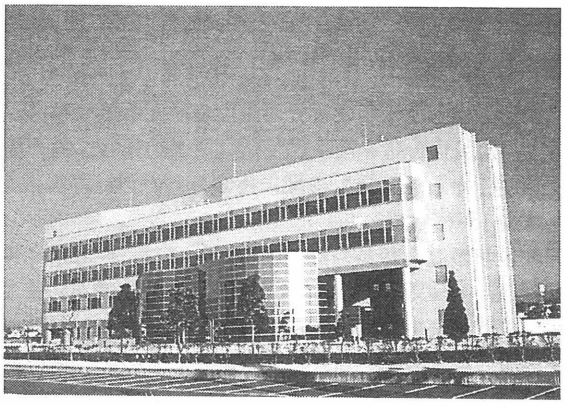

写真１　群馬県衛生環境研究所（絵はがき）

図１に所在地を示したが，ＪＲ両毛線前橋駅からバスに乗り換えるが，公共交通機関での訪問には不便である．

沿革は，明治11年に衛生関係試験検査業務のために群馬県衛生所が，明治38年に伝染病病原体の分離同定業務の増加により群馬県細菌検査所が設置された．これらの施設を母体として，昭和24年11月４日に群馬県立衛生研究所が設置され，昭和46年４月１日に群馬県公害研究センターを併設したが，昭和53年４月１日に両施設を統合して群馬県衛生公害研究所とし，平成４年４月１日に群馬県衛生環境研究所に改称して現在に至っている．

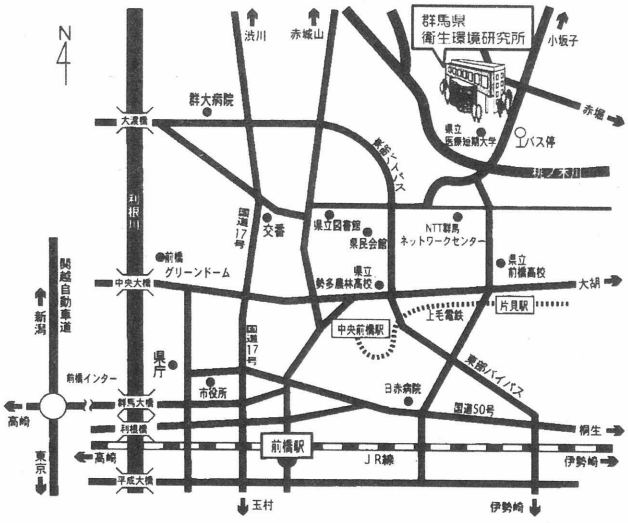

図1　群馬県衛生環境研究所の位置

〒371-0052　群馬県前橋市上沖町378
TEL 027-232-4881，FAX 027-234-8438

群馬県立衛生研究所が設置されてから平成11年度はちょうど50周年にあたる記念すべき年であり，平成12年２月28日に設立50周年記念行事の一環として「平成１１年度群馬県衛生環境研究

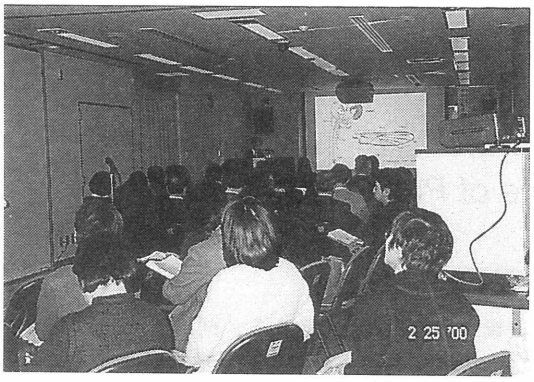

写真２　平成11年度群馬県衛生環境研究所
50周年記念業績発表会

所業績発表会」(写真２)が開催された．上州名物の「からっ風」の吹きすさぶ中，筆者は参加させていただいた．紙上発表と口頭発表を合わせて38の業績発表がＯＢも招いて行われ，温泉に関しては衛生化学課の丸山章代主任によって平成８～９年度に川中温泉の「美人の湯」を対象として行った「温泉源保護管理に関する研究」が発表された．

組織を図２に示すが，４部９課制，職員数42人(平成12年４月１日現在)である．温泉関係の業務は生活科学部衛生化学課で担当している．衛生化学課の業務内容は飲料水，生活排水，医薬品，廃棄物および温泉に係る試験検査及び調査研究となっており，課長以下４名構成ですべて薬剤師である．

温泉分析は平成４年度まで衛生環境研究所で一手に行っていたが，平成５年度から温泉小分析と新規掘削の温泉中分析を衛生環境研究所が担当し，再分析(浴用利用で10年毎，飲用利用で３年毎)は新たに環境庁から温泉分析機関に指定された(社)群馬県薬剤師会環境衛生試験センター(前橋市西片貝町5-18-36)が行っている．

行政依頼の温泉関係の調査研究としては，昭和63年度から行っている「温泉源保護管理に関する研究」がある．その研究は人為的な影響のない自噴泉の泉温、湧出量及び化学成分(温泉小分析項目程度)の変化を同一源泉において月１回，原則として２年間継続測定するものである．平成10年度及び１１年度は四万温泉の「橋下の湯」を対象としている．現地調査や採水は四万温泉を管轄する中之条保健福祉事務所が担当している．また、「群馬県の温泉の化学的研究」として，平成５～９年度に新規掘削で中分析を行った源泉について小分析項目程度の追跡調査を行い，その間の泉温や化学成分濃度の変動についてまとめ，平成11年８月に群馬県草津で開催された温泉科学会第52回大会で発表された．

この研究所における温泉分析は，昭和２６年から本会員の瀧島常雄氏によって始められ，昭和45年に酒井幸子に受け継がれた．瀧島氏の温泉に対しての情熱は深く，昭和50年４月に薬務課(群馬県の温泉行政の主管課)長として転出した後には，社団法人群馬県温泉協会(会長は本会員の木暮金太夫博士)の設立に奔走した．

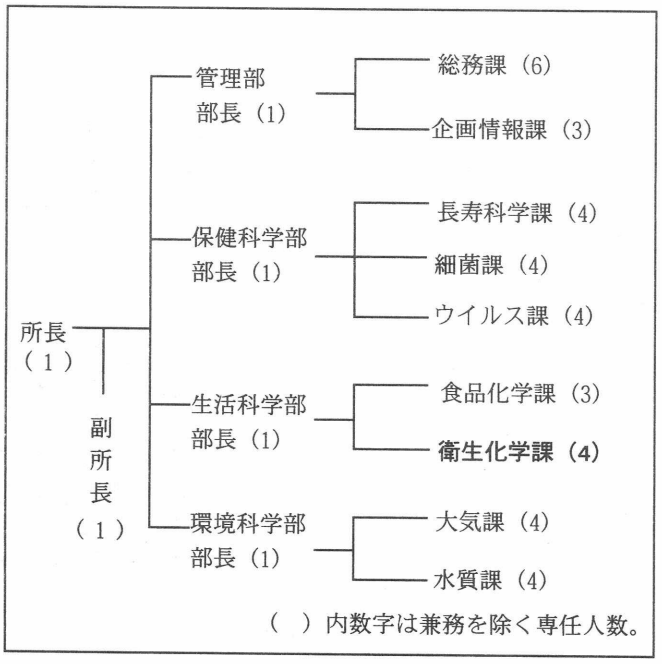

図２　群馬県衛生環境研究所の組織図

昭和46年の草津町振子沢スキー場における硫化水素中毒事故に端を発して環境庁が温泉浴場における硫化水素の基準作りを行った時も，群馬県衛生環境研究所は万座温泉を調査対象温泉として協力をした．筆者は岩神町に在った旧庁舎に23年間在職し，温泉の分析・調査研究に従事した．筆者が瀧島氏と共に温泉の分析や調査研究に過ごした５年間は、岩手県衛生研究所には佐藤彰氏、山梨県衛生研究所には秋山悌四郎氏等，地方衛生研究所における温泉研究のベテランが活躍している時期でもあった．

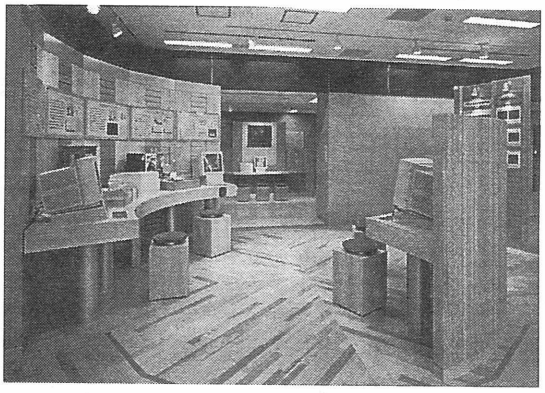

写真３　展示・学習ゾーン（絵はがき）

この研究所について特筆すべきことは，平成12年２月23日にISO14001を認証取得したことである．都道府県の環境研究施設としては全国で４番目の取得である．ISOは国際標準化機構（International Organization for Standarization）が制定した環境マネジメントシステムの国際規格であり，PDCAサイクル（Plan：計画，Do：推進，Check：点検，Action：見直し）を構築し，日常業務の中で環境配慮を進め，環境負荷の低減を図るものである．

新たに建設された新庁舎は１階に「地球環境と健康づくりの展示・学習ゾーン」（写真３）を約570m^{2}の面積で設置し，県民に開かれた研究所としてスタートした．今後のさらなる発展が期待される．

酒井幸子（群馬県環境生活部環境保全課）

特集「温泉と地震」「温泉と火山」の編集をおえて

兵庫県南部地震（淡路・神戸大震災）の後、地震の前後に温泉や地下水に変動があった。地震前の変動についても多くの報告がいろいろな報告会や学会で発表されたりした。４～５年たち、全般に落ちついてきたので、それらの報告などを温泉科学の会員が見直す必要があるのではと考えた。編集委員の方々、特に大山委員長の強力な賛同をえて、特集を企画し編集を引き受けた。不慣れのため温泉科学第48巻第4号は見にくい出来で、力をこめて寄稿して頂いた方にご迷惑をおかけした。ページ数のつごうで、特集を次号（第49巻第１号）にも分けて掲載した（野田徹郎氏の第48巻第4号の序文参照）。

第49巻第１号を出しほっとしたときに、小坂丈予先生から、「今度は『温泉と火山』を企画したい、寄稿者は自分が声をかけてみる」とのことで、再びお手伝いすることになった。「温泉と地震」の特集のあとだったので、「火山噴火前後の変動」と考えられたのか、投稿の内容がせまくなり、特集の趣旨と少し異なる結果となった。噴火活動と温泉の研究はやはり草津白根火山に関するものが主であった（小坂丈予氏の第49巻第4号の序文参照）。第50巻第１号の締め切り後、有珠山の噴火があり、大山正雄編集委員長の要請で、北海道立地質研究所の秋田藤夫氏ほかの「有珠山噴火に伴う温泉・地下水の変化（速報）」の投稿があった。時機を得た投稿であった。全体としては、広い意味での「温泉と火山」の投稿を期待していたのだが、今後これを契機にして、温泉科学誌への活発な投稿があればと念じている。

西村　進　（ｼﾝｸﾀﾝｸ京都自然史研究所）